

まちひとしごと

Vol. 4

ラフティングガイド 辰己 博実さん

やってみたいと思うことには常に挑戦を



ラ

フティングを楽しんだ小さな子どもが、ゆったりとハンモックに寝そべる。それを笑顔で見守る家族。そんな和やかな雰囲気の中、ガイドを終えた辰己博実さんが笑顔で迎えてくれた。

徳島県出身の辰己さん。高校2年生の時スノーボードに出会い、その虜となった。とにかくスノーボードが大好きだった。1度訪れたことのある倶知安町で、やりたいことを精いっぱい楽しもうと思った。資格を取り、夏はラフティングガイド、冬はスキー・スノーボードのインストラクターや山岳ガイドを始めた。

「冬だけでなく、夏のカヤックなど1年中楽しめるこの町で暮らしたい」と辰己さんは笑顔で語った。

事故が起きたのは2008年3月

10日のことだった。スノーボードのジャンプに失敗し、背中から落ちてしまう。落ちた瞬間、背骨の上下にドーンという衝撃が走り、その後、下半身の感覚は無くなっていった。

病院に運ばれてすぐに、医者に脊髄を損傷していること、今後立つことができないことを聞かされた。

「普通は、もっと後になってから告知するのですが、僕の場合は事故後すぐに告知されたんです。もちろん、落ち込んだり泣いたりもしましたが、早めに告知されたことが返って自分の中のリセットになって、このままではだめだと気持ちを切り替えることができました」と辰己さんは当時の気持ちを語る。

退院後、仲間や家族の協力を得てカヤックを再び始めた。壁にぶつかったときも、地道に乗り越え、その積み重ねが大きな自信になっていった。

チェアスキーに挑戦したことからはヒントを得て、当時日本にはまだなかったチェアスノーボードを、知人と共に創り上げ、もう一度大好きだったスノーボードに乗るという夢も叶えた。

「自分の体がどこまで使えて、どこまでできるのか、とにかく挑戦したかったんです」

やりたいことが次々とあふれ出てきた。4年前にアウトドアの会社を立ち上げたのも、小さな子どもやお

年寄り、障害のある人たちがラフティングを楽しめる環境を作りたいという思いからだ。今では辰己さんのガイドの元、多くの人が湧水の池でラフティングを楽しむ。

「確かにこれまでに苦労はありましたが、くじけそうになったことは1度もありません。大好きなことをしているのですから。仕事はもちろんチェアスノーボード、カヤック、サーフィンなど、今やっていることの全てが楽しくてしょうがないんです」

現在、辰己さんはパラカヌーの競技選手として、2016年、ブラジルのリオで行われるパラリンピックの出場に向けて挑戦を続けている。

「やりたいと思ったことには挑戦することが大切です。怪我をしてすぐは諦めた時期もあります。でも一つずつ積み重ねて、やりたいことができるようになります。一歩ずつ、理想に近づけるステップを踏んでいけたらと思います」

好きなことを全力で楽しむ辰己さんの笑顔から、ワクワクがこちらまで伝わってきた。